



Title	地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築
Author(s)	敷田, 麻実
Relation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学会.
Citation	「観光創造学を考える」研究会録 / 北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 20-46
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56569
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference paper
File Information	03_1shikida.pdf, 発表



◆研究発表 3

地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築

北海道大学観光学高等研究センター

敷田麻実

地域をめぐる再編プロセスとしての観光創造

これまで大枠のお話がいくつかありましたが、ここでは私が取り組んでいる話題を入れたテーマでお話したいと思います。地域資源戦略と観光交流による都市・田舎関係の再構築です。主に、私が授業でも取り上げている地域資源戦略と都市・田舎の関係についてお話したいと思います。発表内容は3つに分かれており、①自分がやっていること、②観光創造学に対するスタンス、③現在のトピックです。

現在やっていることは、統合的地域ガバナンスといい、資源を使っていく時に、どのような人が関わるかという研究であります。マネジメントというのは what to do, 「何をするか」ですが、ガバナンスは who what to do, 「誰がするか」という違いがあります。この「誰が」が、私の研究では非常に大きな部分を占めています。

参加しているプロジェクトは資料のとおりです。今日お話しする内容は、主に国連大学で研究者と一緒にやっている「都市と生物多様性プロジェクト」の中の研究成果であります。このプロジェクトでは生態学、社会学、経済学と、多様な研究者が参加しています。あとは、科研費プロジェクトや、知床の自然科学委員会でのプロジェクトからの成果です。

最初の話に戻りますと、「創造」とは何かです。日本創造学会で創造の定義が整理されていますが、いずれも似たようなことが書かれています。資料の一番下に「創造とは、人が異質な情報群を組み合わせ統合して問題を解決し、社会あるいは個人レベルで、新しい価値を生むこと」とありますが、最後に「新しい価値を生むこと」と社会との関係が明確に書かれています。観光創造についてそれ

と対比して、創造と付く単語を比較してみるとヒントになるのではないのでしょうか。環境創造、知識創造、価値創造、前者2つと後者は少し種類が異なります。前者はきわめて産業化された分野であるということです。環境創造は環境に関する産業や仕事といえます。知識創造もナレッジ・マネジメントや、企業のマネジメントということで産業と結びついています。この2つに共通するのはまた、科学に結合していること、たとえば環境科学や知識科学と結合して産業化されてきたということです。この意味での科学というのは、おそらく数量化とほぼ同義であると思います。

このように考えてみますと、創造のプロセスはまず、おそらく不定型なものを実体化するためのシステム、仕組みをどのように作っていくかだと思います。次に、自分以外の他者との相互関係による、従前なかったものの創出、創発です。そして最後がポイントですが、プロセスというものの重要性が非常にあるだろうということです。

一方、生態学には面白い考え方があります。生物は種から芽が伸びて開いて花が咲いて終わるという考えが普通の人の見方です。花が咲くところが終着点であり、花が咲くという創造がある、という考えをします。しかし、生態学では、そこで止まっているのではなしに、花が咲いた後にそれが枯れて分解されて土に戻ってという輪廻のような考え方をします。資料の図は、生態学者のHollingが1987年に示したモデルで、3番を見ると Creative Destruction と書かれています。これは破壊的創造と訳して良いと思いますが、組み替えたところからまた新しいところへ戻っていくプロセスです。戻っていく時のポイントは、ゼロになるのではなく、もう一度組み替えが起きていま

す。つまり、環境創造とは、既存の環境を全部ひっくり返してお払い箱にしているというよりも、組み替えたことでエネルギーをより有効に使える1つの方法だと考えられます。

このように考えると、観光創造とは、先ほどから議論も出てきておりますが、資源をめぐる地域内外の組織とコミュニケーションの再編プロセスというふうに考えていくことができます。ここでの大きなポイントは、プロセスは繰り返していくかということです。一回だけのものを見るというのはおそらく観光創造としては不完全で、プロセスがなぜ必要か、どのようになっているかということが重要になると思います。

地域構造の変化と統合デザイン型地域づくり

さて、話題になっているエコツーリズム、エコツアーについてですが、面白いグラフがあります。日経テレコムで調べた、新聞記事にエコツーリズム、エコツアーが出てきた頻度です。右の方が最近で、2008年にエコツーリズム推進法が施行されていますが、そのあたりをピークにして逆に記事数は減ってきています。どういうことかといいますと、人気がなくなったのではなく日常化していった、無理に説明をしなくても、要するにニュース性のない現象になったということです。残念ながら、私がエコツーリズムの本を出したのは2008年で、慌てて2011年にエコツーリズムと資源の本を出さなければいけなかったのはこういうこともありました（笑）。

もう1つの疑問は、エコツーリズムだけで存在できるのだろうかという点です。エコツーリズムは一般に、自然を楽しむ観光と単純に翻訳されたり、また環境に優しい観光といわれたりしてきましたが、おそらく環境と人との関係に対して十分な魅力を提案できなかったために、普通のエコツーリズムという言葉になったのではないだろうかと考えています。

実はこのような変化のように、私たちの社会は大きく変化しています。ここからは、私がこの半年

くらいで見えてきた、いろいろな変化に関する資料です。まず、「激しく移動する」と書いてありますが、1960年に私たちの1年間の移動距離は2,358kmでしたが、2005年になると4倍近くに増えています。とにかく私たちは、移動することを前提にして生活をしていると考えられます。

さらに社会の構造が変わってきており、資料にあるのは非常に大雑把な図示ですが、X軸は社会の閉鎖性について概念的に示しており、左側は閉鎖性が強く、右側は開放性が強い社会と考えてください。Y軸は、上は関係者の結びつきが強い、下は結びつきが弱いことを示しています。このようにシンプルに考えてみますと、これまで日本社会が馴染んできたのは、①の、地縁・血縁、男性や有力者が中心で、規律と統制によって維持されてきた社会といえます。これはこれで理由があって維持することが出来たわけです。ところが、社会変動によって地域資源や地域そのものに対する関心が失われてくると、外に向かつては閉じているが、地域に関心がなく結びつきが弱い②の状態になる可能性が出てきます。一方、地域に愛想を尽かした人や仕事を求めて都市に出た人は③で、個人化が進みます。②と③が、この何十年かの間に増えてきたということが、私たちが直面している地域の問題ではないでしょうか。

実は、②と③は維持が非常に難しい社会です。②は、私たちがよく地域の問題を考えるときに聞きするように、誰も意欲を持って地域に取り組まない、バラバラである状態です。さらに③は、バラバラではありますが、さらに相互無関心も加わった拡散型の社会で、一般には都市社会といえます。②は、シャッター街と私たちが揶揄しているような地域になるのではないかと思います。

そこで④のような、外に向かつてある程度解放はされているが地域の中の結びつきも最低限維持できるような、新しい仕組みを用意しなければなかなか解決ができないのではないだろうか、というのが1つの提案であります。

都市と田舎の関係性の再構築

さてそういう中で、観光地域づくりやまちづくりが期待されていますが、エコツーリズムと違ってこちらは記事数が順調に伸びています。おそらくニーズがあるのものであり、グラフの赤色は道新の記事ですが、北海道地域においても同様の傾向で記事数は増えているのでやはりニーズはあると思われます。

しかし、この「地域づくり」は、私たちが単純に地域づくりというほどシンプルなものではありません。おそらく私の父が考えている地域づくりと、私の考える地域づくりと、私の娘の考える地域づくりは意味が違っているだろうと思います。

国内で最初に行われた地域づくりは、ほぼ合意ができていたところだと思いますが、インフラの整備の地域づくり。ところが、一村一品のように何かテーマをもった地域づくりが 1980 年代以降に現れます。これは、インフラの整備が行き渡ったために出てきた地域づくりだと思います。さらに、2000 年代以降になると、地域だけではなく自分の生活も、つまり自分の満足も欲しいし、地域の良くなればと両方欲しいというスタイルに変わってきたのではないのでしょうか。ここに、今私たちが観光の中でも取り上げようとしている問題があるのではないかと考えています。

地域づくりの定義は、これまでも出てきましたし、これからも触れられるでしょうから、ここでの説明は省略したいと思います。地域づくりは持続可能であることが 1 つの条件ですが、4 ページのグラフは、持続可能性についての研究がどれくらい行われてきたということを示しています。単純に見てわかりますように、右肩上がりです。特に 80 年代後半からは、急激に伸びた時期がありまして、これは社会の現象と連動しているのではないのでしょうか。

さて、この持続可能性ですが、もっとも問題となっているのは都市部の持続可能性です。今の世界人口のほぼ半分は都市部に住んでいると推定されています。1950 年には 3 割しか都市部に住んで

いませんでした。今は、先進国だけでいうと 8 割が都市部に住んでいます。推定で毎日 17 万人が都市部に流入している世界です。このような社会の構造変化が起こっています。

Bettencourt による面白い研究がありまして、都市人口が 2 倍になると都市機能が 15% 増加するという統計的な分析です。都市の人口が倍になると、例えば札幌市の人口の 2 倍が横浜市ですが、札幌市の平均給与の 15% 増の平均給与が横浜市では支払われているし、レストランの数も 15% 増になるということです。つまり、都市は拡大することによって効率を上げて成長する。そして発展方向にどんどん向かうのが普通であるという研究です。一方、ロスも増えまして、犯罪率も 15% ずつ人口が倍になるにしたがって増えていくと研究は指摘しています。

そこでこの都市の反対になる部分というのが田舎です。田舎という言葉を使っているのには理由があります。OECD 25 か国の 75% は、私たちが農村と呼んできた田舎の土地です。そのうち 96% が農地で占められています。しかし、ここで活動している人、農業就業者は全体の 13% しかいません。田舎の総生産、農村といわれる場所の総生産は、OECD 地域のたった 6% しかないのです。この現状を見て OECD の各国が考えたことは、「新しい田舎」というものが存在しているのではないかとということです。

この「New Rural Paradigm」は 2006 年に出た OECD の報告書で、従来の田舎は農村地域で、補助金がないと成り立たない地域といわれていたが、実際にはよく見てみると、田舎は農村というのはなくて田舎であり、補助ではなく投資で成り立つという考えが示されています。この投資の対象として経済活動がいくつかあげられているのですが、この中にツーリズムという言葉が使われていて、1 つの田舎という場所・空間を支える 1 つの重要な産業だと位置づけられています。

この「都市と田舎」の関係では、繰り返しヨーロッパの研究者によって指摘されている言葉です

が、disconnectedness という問題があります。つまり、作り手と食べる人たち、これはそのまま田舎・生産地と消費地というふうに分けることができますが、この 2 つに大きく分離された構造社会が起きつつあるという指摘です。これを別の視点から整理しますとどうなるか、資料の図をご覧ください。左にあるのが田舎・農村で、右が都市と位置づけます。そうすると、田舎に私たちが期待しているのは伝統文化であり生き物が豊かな場所、つまり生物多様性のある場所ということになります。一方、都市が伝統文化や生物多様性ではなく、現代文化と創造性を担えばいいのだと。都市の中では人工的に自然を作ることができます。これを都市内自然といいます。これは環境創造だというふうに位置づけられ、大きな産業になっています。このような分離というか、田舎の担うものと都市の担うものは別々で、これをうまく組み合わせれば良いのではないかという考えが 1 つの捉え方であるのは事実です。

ここで、伝統文化が都市にないはずはない、都市にも伝統文化があるという指摘があると思いますが、それはもともと、私たちが田舎に期待しているのは伝統文化が多いし、たとえばいろいろな生物がいるけどそれを維持するためにいろいろな風習や習慣があって維持されるだろうという言葉がそれにあたります。つまり、生物多様性とリンクした伝統文化というのが、私たちが田舎に期待をするものになっているということです。

生態系サービスと文化サービスの関係

この田舎の問題を考えると、最近注目されている概念が 1 つあります。生態系サービスというもので、これはおそらく近いうちに新聞などのメディアでも日常用語になっていくと思います。それは生態系から来るメリットは計測できるという 1 つの概念です。昨年に出されました「生物多様性国家戦略 2010-2020」の中でも、明確にこの生態系サービスを私たちは社会として認めなければいけないと示されました。このサービスを計測

して効果的に活用することで、私たちの社会がつくられていくということになっていますが、残念ながら、その中では文化的サービスが一緒にたにされて、他の、基盤サービス、供給サービス、調整サービスと比べると、はるかにあいまいな位置づけにされてしまっています。つまり、私たちの社会で持続可能であるために生態系サービスを使用し始めていますが、その中で文化的なサービスがよくわからないまま、何かあればいいものくらいに位置づけられているということです。

ここで、生態系と文化との関係はどうなっているのかを考えてみます。これはまだ研究会で議論をしている資料ですので、いろいろ異論があると思います。私たちはもともと生態系とお付き合いをすることによって何かモノを得ています。たとえば、生態系、川へ行行って餌を釣り針につけて下ろすことで魚が釣れる。これは川へ働きかけて生態系サービスとして食料としての魚を得たということです。この関わりがあるからこそ、私たちは生態系サービスを受け取れるということになります。この関わりとは、よく考えると川とお付き合いで、生態系との関係を作ることになるので、これを大胆に文化と考えても、大きく外れはしないと思います。文化の原初形態は、おそらく私たちが何らかの自然環境と出会ったときに形成されました。生態系サービスをどのように使うか、どのように付き合うことで、文化が形成されたと考えることができます。

このように自然環境と一般にいつている生態系の中に私たちが存在していると考えれば、この自然環境・生態系と私たちの関係を文化と捉えることができます。

さて、生態系とお付き合いの中で生じた文化は、文化から文化を生成することも可能です。つまり、文化同士が交流することで、新たな文化を生むことができるのです。これがよく出来るのはおそらく都市側であり、田舎側ではおそらく生態系と人との地道な付き合いから文化を生成していくことになります。

また、文化というのは形が出来上がると、例えば、文化遺産の形になると、消費することが出来るようになります。文化サービスとあえて呼びますが、サービスとして文化を意識することが出来るという意味です。先ほどの生態系サービスと同様に、文化サービスも私たちが何らかのメリットを得ているときに使うことが出来ます。

ところが、ここに大きな問題があります。先ほど、生態系と文化を別々に説明しましたが、この間には行ったり来たりの関係があるということです。皆さまのお手元にカラーの資料がありますが、その一番後ろのページにコウモリを食べる習慣の例が出ています。そこにコウモリの写真がありますが、これは石川県金沢市のコウモリを食べていた集落のことについて調べたものです。コウモリを食べるときコウモリを捕まえないければいけません、この集落では、自分たちが作った石切り場にコウモリが集まってきていた。つまり、私たちが自然に働きかけて作った新しい環境にコウモリが来て、そのコウモリを人が食べるということでやり取りが行われてきたのですが、単純に自然の中からコウモリを獲ってきたのではなく、人が加えた変化にコウモリが反応して、そこが住み場所になって、そしてコウモリを人間が食べた。コウモリの食べ方にも工夫が見られ、いろいろなコウモリの食べ方が生み出されています。つまり、自然環境とのお付き合いは単純な直線ではなく、自然環境と付き合うときにいろいろな食べ方、すなわち文化のバリエーションであり、これを創り出していると考えられます。

生物文化多様性を軸にした都市と田舎の橋渡し

このように、生物多様性や生態系や文化を実は一緒に考えても良いのではないかという提案が、すでに 1988 年に出ています。ブラジルのベレンで行われた学会の宣言文で、biological and cultural diversity という表現がすでにされています。最近では、2010 年に UNECSO のワーキング・ドキュメントが出ており、この中での Loh と

Harmon の定義では、それは世界の中の違いの大きさを表現しているのだと理解されています。つまり文化と生態系を一緒に扱っても良いのではないかという提案です。実はこの考え方は、観光を考えるときに一番重要なポイントといいますか、自然や生態系と文化を分けて考えずに、一緒に考える方が良いのではないかという提案につながっていきます。

さてここで話を戻しまして、なぜそうなのかということ、結論としてお話ししたいと思います。先ほどお話ししたように、農村部・田舎は非常に生物多様性が高く、伝統文化で成り立っているという私たちの暗黙の期待があります。一方、都市部では現代文化と創造性で成り立っていて、この関係というのは 2 つに分かれて別物だと考えて暮らしています。ですから、都市にいる人たちは田舎から生態系サービスを貰って、そのために支払いをしていることになります。観光で考えますと、都市から田舎に観光客が行って体験をするときにお金を払って戻るというパターンであります。この関係を維持していると、役割分担が非常に明確になって、都市は消費者、農村は提供者という関係から逃れることはできません。

この問題を解くために、先ほどの生物文化多様性を考えてみてはどうかということです。この 2 つの地域、田舎にある生態系と都市にある現代文化を橋渡しする役割を観光は負えるのではないか。都市と田舎が分離したものを再結合する役割というのは、観光以外ではおそらく非常に難しい。物量を運ぶ限りは、たとえば田舎で作られた作物を食べることで食べている限りでは、気持ちは理解することができるけども、実際に田舎に行っているのではないので、おそらくこの分離は解消できないのではないかと。観光というのは交流によって分離したものを再結合する 1 つの大きなツールになっていくのではないかと考えられます。

一方で課題もありまして、一方的にこのような交流を進めると、地域にある資源を都会の消費者が一方的に使ってしまうことに繋がるのではない

かという問題が起きます。たとえば、田舎側の資源利用に関する 1 つのパターンですが、資源を直接利用している場合、これは行ってそのまま体験するというスタイルの観光のことです。分かりやすくするためにスターバックスの例でいうと、コーヒーを飲むために店に入ることです。目的はコーヒーを飲むことであり、コーヒーの消費が目的となります。

ところがそうではなく、上手にイメージだけを取り出すことが出来ます。この場合には、直接の消費せずに田舎のイメージだけを上手く使うのです。これはグリーン・ツーリズムやエコツーリズムでよく行われる手法で、スターバックスの例では、コーヒーではなくスターバックスの雰囲気を楽しむために仕方なくコーヒーを飲む、スターバックスを使うためにコーヒーを頼んでしまうというような利用方法になります。

それがもっと高度になると、背景的に使われてしまう。つまり、田舎側が背景の 1 つとして認識されてしまう可能性があります。スターバックスの例では、スターバックスが登場する恋愛小説みたいなもので、恋愛小説の方が大事なのでスターバックスはそのための 1 つの背景となってしまうということです。

田舎が、直接利用されているときはお金を取ることが出来ます。グリーン・ツーリズムでお客さんを呼んで、それに対してお金を支払うというのがやり方で、ある意味では見えるお金のやり取りです。しかし、イメージの利用では、上手に使われてしまう段階に入ってきている。最終的に、背景的な利用をされてしまうとどこの田舎でも同じと。つまり都合良い田舎を選んで使われてしまうという状態になります。先ほど示した、田舎と都市の関係をうまく観光によって結ぶということだけを考えても、簡単ではないということがわかります。

さて、伝統料理も田舎のもっている 1 つの特徴だとすれば、この伝統料理のイメージのように形だけを抜かれてしまう。資料でお見せしているの

はスッポン料理の調理過程ですが、こうした生々しい現場を通り越して、田舎はこのような伝統に基づいた食を食べているところだというイメージだけを抜き取られるという可能性が依然としてあります。

これを防ぐためには、この現象は「生身」と「切り身」という考え方で、すでに整理されているわけですが、全体を体験するのではなくて、良いところだけを食べてしまう考え方、これは常にエコツーリズムやグリーン・ツーリズムが抱えているリスクです。一方で、都市と田舎の関係を結んでいくと主張しながら、こうしたリスクを説明するのは矛盾するように思われるかもしれませんが、当然これを解消するための防衛策を、観光の中にも考えなければいけないだろうと。これが地域のためになる 1 つの貢献だと考えていいと思います。

社会変換装置としてのツーリズム

最後の資料では、今のような仕組みをおさらいしたいと思います。ツーリズムは、都市と田舎の地域資源を新たに結びつけていく 1 つの仕組みですが、おそらく田舎の生態系サービスは、都市の住民にとって消費対象でしかないと思います。一方、都市住民に対して、もっと資源に対して配慮した利用をしなさいということは、都市住民に対して行動を正しくしなさい、つまり田舎をもっと理解して田舎を考えて行動しなさいということです。

しかし、観光客に田舎のことを考えてエコツーリズムやグリーン・ツーリズムに参加しろということ、つまり個々の観光行動において田舎への配慮は不可能だと思います。皆さんの日常の行動を考えても、地域のことを考えてから観光に行くのではなしに、自分が楽しむために観光に行くことが基本だと思います。つまり、自己満足のために投資をする観光行動が日常的に行われています。

例えば、エコツアー、グリーンツアーですが、これを都市の住民の自己満足ではなしに、農村にとって意味のある行動に変換をする必要があります。

す。ですから、ツーリズムというのは、個々の観光客が持っている自分のための投資、観光行動を、ある意味で社会的に役に立つ行動に切り替えていく仕組みを持つ必要があると考えられます。

もう 1 つ、先ほど補助から投資へというお話をしました。そのためには自分たちの価値を説明する必要があります。つまり、地域資源を持っている側は、自分たちの地域資源の価値を外の消費者、都市住民に向かってきちんとした意味のあるものだと言明をしなければならない。自分たちにいくら価値があると思っていっても、その価値が伝わらないようでは、お客さんは来ません。そのためには地域イメージの変換が必要であろうと思います。つまり、ツーリズムというのは地域が持っている価値を社会化する変換をしなければいけないし、社会のニーズに対して説明ができるようにしなければいけない。また同時に、都市住民の一方的な行動、自分が楽しみたいという行動を何らかの形で地域に役に立つように変換をする仕組みを持つ必要があります。

このように、双方向の変換をツーリズムが持ったときに、都市は現代文化、地域は生態系サービスという二分した状況が改善できるのではないかと考えています。それが、今私が大枠で研究で考えていることです。ここでいうツーリズムとは、一種の「社会的変換装置」と考えることができます。単純にお客さんが満足することも入っているし、社会的な意味を観光が生み出すことも同時に実現することができる。

もちろん、これを別々に議論するという考え方もあります。楽しむための観光と、楽しみのためではない観光、つまりエコツーリズムと、環境のためになる観光は別々に存在するのだという議論はありますが、最終的には統合が図られることが、観光創造という考え方では重要になってくるのではないのでしょうか。以上で終わります、ありがとうございました。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：真板

敷田先生らしい、フレームワークからしっかり説明されたお話だったと思います。

実は、研究会は違いますが、先生と同じような研究を私たちもやっています。都市部と田舎の交流ということでは、京都で 1 つの実験をしています。都市の人たちと田舎の人たちの交流が、具体的にはどのように実現可能なのか。観光という 1 つの仕組みの中での実験をしています。そのやり方を、私たちが「一料亭一地域主義」と呼んでいます。例えばナスやキュウリは、1,000 個、2,000 個と作られます。それは市場の原理の中で、市場を通じて京都にも、1 日 1 万個、2 万個と入ってきます。こうしたのではなく、ある地域の中で、先ほど先生もおっしゃった地域の自然多様性と結びついた、少数少量型の地域を代表する食材が存在します。たとえば、香茸というキノコがあります。これは、江戸時代に松茸の 10 倍くらいの値段で取引されたといわれています。それを、ある人間が間に入って、京都の料亭に持って行って売るわけです。料亭は料亭なりにお客さんをもてなすために、それを料理にしてある程度の値段で出す。すると、有名な料亭でその料理が食べられたとして噂になって、なんとか料亭で香茸を食べたと自慢するわけです。しかし、他のところにも卸せるか、市場に出せるかということとそれだけの量がない。先ほどのお話での田舎に住んで、多様性や文化を守ってきたおじいちゃんやおばあちゃんに、そのような生活体系の中における 1 つの誇りを持たせることにつながります。

ところで、これですべて上手くいくかと考えたときに、地域資源の利用を巡って大きなギャップが存在することがわかったんです。それは「価値」です。すなわち、生産をする立場の人たちが、人を喜ばせようとする価値と、おもてなしをして人を喜ばせようとする人の価値は違うんです。例えば、タラの芽があります。私はある有名なてんぷ

ら料亭に話をし、田舎のおばさんたちからタラの芽を出してもらったんです。しかし、後で料亭の女将から電話がかかってきて「先生、申し訳ないけどそれは捨てました」というんです。それで地元聞いてみたら、ちゃんと美味しく食べてもらえるように、丁寧に処理して送ったというんです。つまり、「美味しい」の意味が違う。田舎のおばさんたちは、できる限り大きくして多く食べてもらいたいと思っているので、1つ1つが大きい。しかし、京都の料亭のおもてなしの消費文化における価値は、3口で食べられなければならない。要するに商品としては成り立たないんです。そういうギャップがあります。このギャップをお見合いさせて、消費文化圏の人には、生産地の文化の価値を知らせる。同時に生産している人には、消費地の価値を知ってもらう。相互がそれを交流することによってお互い自慢しあう関係をつくることが必要だと考えました。

今は、第2段階に入っています。京都の中で100の料亭でやろうとしている。東北の小さな、80人から100人くらいの地区と1対1で結びつけて、そこと直接取引をしてもらうとしています。そこで、料亭に来たお客さんに、ここを作ったおばさんたちの所でお祭りがあるから見に行きませんか、という感じで行ってもらう。先ほど先生は、田舎を考えるために都市民が行動するのは不可能かもしれないと言われましたが、僕は不可能じゃないと思います。逆に、そこに惚れた人間が、それを理解した人間が田舎に行って、田舎の価値を知る。そこでいわゆる一見さんお断りのツアーが成立して、そこにその地域と地域のお見合いが成立することで、価値の交流を通してサステイナブルな観光が成り立ってくるのではないかと。料亭が客集めをすると同時に、その自分たち田舎の方はモノを送ることで、価値を高めることができるのではと思いました。そういう意味では、田舎と都市の関係性という分野で一番重要な論点は、価値をお互いどのように理解していくかその仕組みづくりだと思いました。

コメンテーター2：大迫

ありがとうございます。都市と田舎の間に仕組みとしてツーリズムが働くということで、再結合ということもそうですが、融合という意味合いを持っているのかと思いました。都市の中で効率的に消費されるということに重きが置かれていた時代から、ツーリズムを通しての、田舎との交流の重要性が受け止められる局面にあるのだと考えていました。そして、西山先生が観光創造学の分類をされていましたが、敷田先生のお話はそれを貫くようなかたちのお話で、観光創造学の幅広い分野を網羅していて、非常にわかりやすいお話でした。どうもありがとうございます。

コメント：小林（英）

いつもながら、すごく面白いお話でした。ただ、よくわからなかったのが、1つはスターバックスの例です。「イメージを高度化していくことはいいんですよね？」という話なのかと思いますが、その点がよくわかりませんでした。

その点はさておき、資料9ページのこの図ですが、言っていることはよくわかります。しかし、石森先生と西山先生のお話の中に出てきたように、これからは発地側の意識の変化と、着地側の考え方を換えようという、これがイノベーションでしたね。その間をつなぐツーリズム産業のイノベーションの必要性というお話もありましたが、この模式図のように都市と農村の間にツーリズムが機能として、繋ぎ役として常に間に入るという考えは、もしかしたら我々は捨てた方がいいのではないかという気がしています。要は、都市住民の中に新しい考え方を入れていって地域とダイレクトに繋いでいく、地域側も変わっていったダイレクトに都市と繋がっていく、そういう3つの形を考えると、私の考えでは、これを担うツーリズム産業の人々の意識がかなり高くないと現実的に無理だと思うのです。少なくとも日本の観光を担ってい

る旅行・観光産業の現状では、こういう意識はなかなか持てない。そういう新しい考え方をどこに入れていけばいいのか。先ほどのイノベーションの研究の中では、都市住民の中でも発想を変えていく、ツーリズムサイドも変えていく、地域サイドも変えていく。この3つが新しい考え方をに入れて変われるとしたら、この模式図のようにあまり綺麗に分けすぎず、それぞれのパーツも「もしかしたら変わる」ということを想定すべきではないか。「表現だからわかり易くしたらこのような図になった」というのはわかりますが、現状の機能から分けて考えると、社会を変える発想は出てこないで、もうちょっと突っ込んで、たとえば、都市住民でも直接社会貢献して何かやりたいという若い人はどんどん増えていて、それは、ツーリズムだからという話ではなくて、結果的にツーリズムになっているという人がたくさんいるわけですね。地域住民側でも、意識が変わっていくことによって結果的にツーリズムになっている。だから、都市と農村の間にツーリズムこうやって入っていった変換させるんだよと、いう発想からだけだとなかなか変えられないのではないか。結果として、日本の観光産業の意識が低いなというだけで終わってしまうことを危惧しています。今の状況を変えていくにはいくつかの方法があるというのが、先ほど西山先生がおっしゃったイノベーションの3つの分野だと思うんです。それをもっと入れたら、面白くなると思いながら聞いていました。

回答：敷田

コメント、ご指摘ありがとうございます。小林先生のご指摘に対しては、実はこれは考え方が、逆で都市住民の人は自己満足投資ししかしないのではないかと。レベルの高い方もいらっしゃると思いますが、比率からいえば、たとえば自分の身体を改造するためにエステに行くとか、自分の教養を高めるために旅行に行くとか、楽しむために行くというのが圧倒的多数だろうと。そういう人たちと地域がちゃんと渡り合うためには、それはそのま

ま残した上で、こっちが良いところを取る工夫をする仕組みを組み込むしかないということです。逆にいえば、都市は勝手に発展する存在であり、田舎はそれに対して戦略的に対応していかなければならないということを考えております。後でまたゆっくりとお話しできればと思います。